

『在明の別』 卷二本文校訂・読解考

辛島, 正雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/3054020>

出版情報 : 語文研究. 127, pp.15-29, 2019-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『在明の別』 卷二本文校訂・読解考

辛 島 正 雄

はじめに

平安時代最末期の成立と目される作り物語『在明の別』については、大槻修氏によって周到・緻密かつ懇切な注釈書が早くに整備されたためか、本文校訂や読解をめぐる基礎的な研究については、異様に関心が低いように感ぜられた。作品研究の生命線は注釈の充実にこそある、と常々考える身としては、そうした現状打破のためにも一石を投じたい、との思いから、近時いくつかの拙稿^註を公けにしてきた。もつとも、それらは、思いつきを箇条書きしたような断片的なものばかりであり、どれほど『研究の最前線』へのインパクトがあるものやら疑わしくはあったが、そうした作業の蓄積が将来へ

の備えになると信じて、妥協のない検討を心がけたつもりではある。そこで、本稿では、全三巻のうち、いまだ論文らしいものをまとめていなかった巻二について、いくつか問題点を取り上げ、具体的に検討を加えてみることにする。

以下、『在明の別』の本文の引用は市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成 第一巻』（一九八八年、笠間書院。略称『集成』）によるが、『天理図書館善本叢書6 あさぢが露・在明の別』（一九七二年、八木書店）の写真複製により翻字を確認し、引用にさいしては、誤植は正し、適宜不足する活用語尾等を括弧内に補い、句読点・鉤括弧・傍注等についても、私見により改めたところがある。注釈書としては、大槻修氏の『在明の別の研究』（一九六九年、桜楓社。略称『研究』）と『有明けの別れ——ある男装の姫君の物語——』（一九七九年、創英社。略称『全対訳』）とを

参照し、物語の展開を確認する便宜として、『全対訳』に示された段落分けとその見出しを借りた。そのほかの本文の引用は、散文は『新編日本古典文学全集』（小学館）に、和歌は『新編国歌大観』（角川書店）によったが、表記等に多少手を加えたところがある。

一 「この御かたにやがて御まくにまいり給へり。」

卷二は、故右大将の忘れ形見である左大臣が、叔母である女院（じつは、故右大将その人）に対して、かぎりない恋慕の情を捧げている、というところから語り出されるのだが、まずは、「七 女院の風邪で、左大臣参内」の段を取り上げてみよう。

れいのいざとき（左大臣の）御くせなれば、あくるやをそきと御かうしいそぎまいりて、たのむこと、はながめをはするに、おほと（太政大臣）、御かたより、「女院の御かぜのけとなんきく。いそぎまいり給へ」とあれば、れいのまづきくことにむねうちつぶれて、やがてまいり給（ふ）よしきこえ給へば、大宮も御ふみきこえさせ給（ふ）。さるは、「ことなる事をはしませず」と、また御つかひあれど、くくといそがれ給（ひ）てまいり給

（ひ）ぬ。院もをきさせ給えるま、に、この御かたにやがて御まくにまいり給へり。（三七四〜三七五頁／7オ〜7ウ）

ある朝のこと、目が覚めるや、いつもの癖で、たちまち女院へのかなわぬ恋の物思いに耽る左大臣に、その女院が風邪に罹ったらしいから急ぎ見舞いに参上せよとの、祖父太政大臣の指示があった。傍線部Aは『集成』の翻字をそのまま写したもののだが、『研究』（二七〇頁）『全対訳』（二四〇頁）では「女院の給かせのけ」と判読し、「給」を「御」の誤写と見て改訂する。写真複製で確認すれば明らかに「給」の文字であり、厳密な校訂としては、そちらが正しい。同様の誤写は、卷二においても、「はるけんかたなかりし給なげきも」（三七二頁／1オ）、「かやうの給なやみだに」（四〇一頁／50オ）、「あさゆふの給いでいりにつけて」（四〇四頁／54オ。ただし、『研究』（二二七頁）『全対訳』（三四〇頁）『集成』いずれも「御いていり」と翻字）と、計四例が確認でき（卷三にも一例ある。拙稿Dを参照）、誤写が起きるさいの一類型をなしている。

女院のもとからは、「ことなる事をはしませず」との報せも来るが、左大臣はかまわず邸を出て、院の御所に参上する。そして、到着後のかれの行動が、「院もをきさせ給えるま、に、この御かたにやがて御まくにまいり給へり。」と描かれて

がある。すなわち、「この御方に」の直前の主語は院であるのに、「やがて御前に」以下の主語が左大臣であるため、全体の主語が一貫しないのだ。「この御方」と「御前」は、いずれも女院を指すと見て間違いないので、前後で主語が交替するのは、その間に脱文が生じていることを疑わせる。ちなみに、『全対訳』が、「院もお起きになったので、左大臣は、すぐ女院のお前へお伺いした。」(二四一頁)と現代語訳しているのは、本文の乱れには目をつぶって、文意を通すことを優先した処置のようである。

そこで、あらためて文脈を確認すると、左大臣が御所に到着したとき、院は、起床後すぐに女院の様子を知らされ、すでにその部屋に行ったあとであった、と見られる。まずは院への挨拶を、と思つて参上した左大臣であったが、そのような事情で院は不在である。ならば、ということ、院の帰りを待つのではなく、直接女院の御前に参上した、というのが、全体のながれであろうと推察される。このように読み取りさえすれば、主語が一貫しない不自然さも解消されるので、簡単な対処法としては、ひとまず、「この御方に〔わたらせ給へれば、〕やがて御前に参り給へり」、あるいは、「この御方に〔おはしませば、〕やがて御前に参り給へり」といった程度の脱文を想定することで、文章のながれを整えることを提案し

たい。

二「あけとけ^(セカ)していたくふかれにけるにや。」

左大臣の見舞いを受けた女院は、心配するに及ばぬものだったのに、少将(女院「故右大将」の乳母子とおぼしきこの少将については、拙稿Bを参照)が一騒動起こそうと企んだものらしいと、なんの屈託もない。つづく「八院と女院との冗談」の段に入り、女院の発言を受けた院のこぼれを取り上げる。

院もわらはせ給(ひ)て、「けさは少将がいつものみに
もあらず、いとふんびんになん物し給(ひ)つる。夜部
たちかへりあつかりしに、あけとけ^(セカ)していたくふかれに
けるにや。いまはいたうわかやぎ給(ふ)まじかりけり。
いとみじうくるしげに物し給へるを、まろがゆ、しき
くすしかて、かくつくるひやめきこえたるなり。そのろ
くをかせめきこゆべき」との給はず。(三七五頁/8オ)

傍線部を問題にしたいのだが、『集成』の傍記の意図が、どうもよくわからない。「あせ(汗?)とけ」と解したのであるうか。それにしても、見慣れぬ表現である。『研究』では、「原本「あけとけ」戸をあけつばなしにして、しどけない恰好で寝ていることか。源語に例なし。」(二七一頁)と注する。『全対

訳』も同様の注を付し(二四二頁)、前後を、「昨夜は随分と暑さがぶり返えして、葺戸を開け放しておいて、ひどく冷気にあてられたのでしょうか。」(二四三頁)と現代語訳している。文脈からすると、『研究』『全対訳』の解釈でよさそうに思えるのだが、戸を開けたまま、気を許して寝る、という意味の「開け解く」なる語が存在するものか、すこぶる疑わしいので、このまま従うのは躊躇される。そこで、ここに誤写を想定してみると、どうであろうか。

例えば、「とけ」の「け(遣)」を「を(遠)」の誤写と見て、「あけとをして」と改めると、ここは「開け通して」と解することができる。「開け通す」については、『日本国語大辞典第二版』(二〇〇〇年、小学館)に、「あけーとおす【開通】を立項し、「閉じていたものを開けて広げる。開け放す。」と説明し、用例に『浅茅が露』を掲げる(初版も同様)。

東の廊の方に、関伽棚をして、持仏堂に障子、開け通して、関伽奉る尼君ありけり。(『中世王朝物語全集1』「一九九九年、笠間書院」二七六頁)。

わずか二例では心もとないので、ほかにも用例がないものか検索してみると、『群書類従』(八木書店)中に二例がヒットした。ひとつは、『枕草紙』(塚本)に、

まつたかきひむがしみなみなどのかうしあけとをしたれ

ば、すゞしげにみゆるよ。(二七輯・雑部・三六三頁。三卷本巻末の「二本」に見える「松の木立高き所の」の段には、「松の木立高き所の、東南の格子上げわたしたれば、涼しげに透きて見ゆる母屋に」(四六〇頁)とある)。

と見えるもの。いまひとつは、『為尹卿千首和歌』に、

夜水鶏

すゞむ夜の横の戸口、あけとをしさてやた、かぬ水鶏成らん(口輯・和歌部・一二頁。『新編国歌大観第四巻』にも所収「二五七番」)

とあり、いずれも「開け通し」(ただし、和歌は連用形が名詞化したもの)と解して問題ないところである。『新編国歌大観』を検索すると、『草根集』にも、

山里は煙もたてぬ宿の戸、あけとほす冬のおくぞさびしき(冬山家・六二八八番)

とあるのが追加できる。よって、ここも、「(戸を)開け通して」と改訂することで、本文上の不審を解消することにした。結果としては、『全対訳』に示された解釈が、ほぼ正解に辿り着いていたといえよう。

三「あまりさまかはれる」文

次に、「三七 中務卿宮北の方から便り」の段全文を取り上げてみよう。

けふは中宮のいでさせ給(ふ)べき御しつらひ、なにやかととの(＝太政大臣)、の給はせまとはすひまなさに、(左大臣は)御みもいとくるしう、あぢきなきまでおぼされて、しばしわが御かたにうちやすみ給えるに、(先日の逢瀬のおりに)御ともせしきこんのせう、くれなるのなべてならぬうすやうの、うはべまでまぎるべうもあらず、このましげなる御ふみをさしいでたる。とるてにうつるにほひも(誰からの文であるか)しるければ、「いづこの」などはたどられず、「さりや、ひさしうもなりにけるかな」と、思かげこひしうおほしいでられて、ひきあけ給へれば、

A 「袖のうゑにあまるなみだのくれなるにわれのみつらきをの、あさぢふ

あしわけのほどもことほりならぬにはあらねど、さらにえながらうまじくのみ思ひならるゝには、あらざらんよの思ひいでに、みをつくしても」とあるが、あまりさまかはれるにつけても、たゞいまさしむかひたる心ちして、

いとあはれとはみたまふ。

B 「くれなるのなみだは袖にあまるとも君がなをさへよにはもらさじ

と思ひたまふるばかりにこそ。あしのやえぶきもいとつ、ましう、

やすらひしまきのいたどのそれならばあけぬくれぬとなれもしなまし

心うく」とあるを(中務宮の北の方は)ひきあくるよりをしあけて、^(前)あしずりとかや、みどりこのねをやたてそえ給(ふ)らん。(三九六～三九七頁/42ウ～44オ)

女院への恋慕の情を胸の奥底に秘める左大臣は、そんな思いの紛らわしにならぬこととはわかかっていても、つい女たちと交渉をもってしまう。そのような相手のひとりには、中務宮の北の方がいた。左大臣は、父親である源氏の入道の隠棲先に身を寄せる北の方母娘を垣間見して、娘が妹の中宮に似ていることに魅力を感じつつも、母である北の方のほうと契りを結んだ。北の方は、四十歳を越すみずからの年齢を気にするふうもなく、若い左大臣との情事に感溺する。ところが、別居生活がつづくことに不満な夫中務宮が、業を煮やして母娘を自邸へと強制的に連れ戻した結果、ふたりの逢瀬の道は途絶えてしまう。情熱を持て余す北の方は、夫を嫌悪し、身

悶えするばかり。左大臣にもなすすべはない。そんなとき、北の方からの「あまりさまかはれる」文が、左大臣に届いた。ここについては、本文校訂上の問題は少ないので、その文が「あまりさまかはれる」とされる所以と、引歌が多用される文のやりとりの機微について、丁寧に読み解いてみたい。

北の方の文は、太字Aがその全文であるが、前置きなしに、いきなり、

袖の上にあまる涙の紅にわれのみつらき小野の浅茅生

という歌からはじまる。この歌の下句について、『研究』(二三頁)『全対訳』(三二六頁)では、次の三首を参考に掲げる。

・しばしとも人はとどめぬ別れぢの我のみつらきあかつきの空(『続千載和歌集』卷十三・恋三・一三五一番・別恋を／寂恵法師)

・夕されば小野の浅茅生玉ちりて心くだくる風のおとかな(『千載和歌集』卷四・秋上・二七二番・秋歌とてよみ侍りける／撰政前石大臣)

・浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人のこひしき(『後撰和歌集』卷九・恋一・五七七番・人につかはしける／源等の朝臣)

ほかにも、「小野の浅茅生」を第五句に据えた歌としては、秋風にとやまの鹿は声たてて露吹きむすぶ小野の浅茅生

(『続拾遺和歌集』卷四・秋上・二五九番・題しらず／皇太后宮大夫俊成女)

があるが、「夕されば」の歌同様、いずれも恋の歌を秋の叙景歌に転じた詠みかたである。源等の歌の類歌としては、

浅茅生の小野の篠原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに(『古今和歌集』卷十一・恋一・五〇五番・題しらず／読人しらず)

も知られる。ここでは、「小野の浅茅生」と、同時代の和歌に見られる叙景歌的表現をとつていながらも、それらの本歌である「浅茅生の小野の篠原」両歌を想起させることで、「忍ぶ恋」の表象として機能させていることに留意したい。

また、上句の参考になりそうな歌としては、次のようなものが指摘できる。

・袂にも袖にもあまる涙かなこれをいふかは衣川とは(『任吉物語』上巻・七五頁)

・せきかねてあまる涙の紅に袂さへこそ色かはりけれ(『新千載和歌集』卷十一・恋一・一〇六三番・おなじ心「恋」を／久良親王)

・浅茅生の小野の白露袖の上にあまる涙の深さくらべよ(『定家名号七十首』秋・一七番)

北の方の文は、「取る手にうつる」ばかりの「紅のなべてな

らぬ薄様」に書かれたものであったが、それは、逢いたくても逢えない、左大臣との「忍ぶ恋」のつらさに堪えかねて溢れ出る血の涙を、自分の袖では拭いきれなくなった、との訴えにあわせた、特別な趣向であること、いうまでもない。

そのあとにつづく文章が、引歌の畳みかけによる切迫した文面となっており、『研究』（二二三頁）『全対訳』（三二六頁）が指摘するように、以下の三首による。

・みなと入りの葦分けを舟さはりおほみわが思ふ人にあはぬころかな（『拾遺和歌集』巻十四・恋四・八五三番・題しらず／人麻呂）

心地れいならずはべりけるころ、人のもとにつかはしける^②

・あらざらんこの世のほかの思ひ出にいまひとたびの逢ふこともがな（『後拾遺和歌集』巻十三・恋三・七六三番・和泉式部）

事いできてのちに、京極御息所につかはしける

・わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはん
とぞ思ふ（『後撰和歌集』巻十三・恋五・九六〇番・元良のみこ）

『拾遺和歌集』巻十二・恋二・七六六番）

それぞれの歌の傍線部の表現は、文のなかに、「葦分けのほども、ことわりならぬにはあらねど、さらにえながらふまじくのみ思ひならるるには、あらざらん世の思ひ出に、身をつく

しても」と、わかりやすく引かれるいっぽう、同時に、北の方がほんとうに訴えたい気持は、むしろ歌から直接には引かれなかった圈点部分にこそ託されていた。すなわち、「わが思ふ人にあはぬ」状態が続いているが、なんとかして死ぬ前に、「いまひとたびの逢ふこと」を実現し、身を滅ぼしてもかまわないから「あはん」という一途な願い、それこそが北の方の訴えたいことなのであり、引用過多、かつ息の詰まるような文面に、「あまりさま変はれる」と感じつつも、その迫力にいい引き込まれる左大臣なのであった。

そうした異様なまでの北の方の文に対して、左大臣はどのように応じたか。太字Bがその全文である。まず、

紅の涙は袖にあまるとも君が名をさへ世にはもらさじ
と思ひたまふるばかりにこそ。

とあるのは、「袖の上にあまる涙の紅に」云々と歌で訴えてきた北の方に、同じく歌で、あなたは「われのみつらき」というが、わたしだって「君が名」を漏らさぬために、そのことを最優先にして逢えぬつらさに堪えているのだ、という。つづく、

葦の八重葎きもいとどつつましよう、

は、北の方の文に、「葦分けのほども、ことわりならぬにはあらねど」とあったのを承けての引歌表現。『研究』（二二四頁）

『全対訳』（三二八頁）には次の歌を掲げる。

つこの国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葎（後拾遺和歌集） 卷十二・恋二・六九一番・題不知／和泉式部

『全対訳』では、「何かと雑用ばかり多くて、それが大層気の引けますこと。」（三二九頁）と現代語訳するが、そのように理解するためには、和泉式部の歌が踏まえた次の歌によると見たほうが、むしろしっくりくる。

つこの国の葦の八重葎（古今和歌六帖） 第二・国・一二五八番
ろかな

北の方が引く「みなと入りの」の歌とは、下句の表現がほとんど一緒であり、「さはりおほみ」に対して「ひまをなみ」と返した、ということでもうまく対応するのだが、ただし、忙しくて（逢いに行けないので）気が引ける、という言い訳そのものが、切り返しというにはあまりに切れ味に欠けるので、やはりここは、和泉式部の歌を踏まえたものとして、次のように解きたい。

和泉式部の「葦の八重葎」の歌のように、あなたが「こや（＝来なさい）」といってくれても、（現実には夫の中務宮と一緒に）「ひまこそなけれ」という様子なのも、ますますもって遠慮されて（逢いに行けません）。

そして、左大臣の文は、次のように結ばれる。

やすらひし真木の板戸（後撰和歌集）のそれならば明けぬ暮れぬと
なれもしなまし
心うく。

北の方の文が歌一首であったのに、返事では歌二首になっている。過剰な引歌表現がなされていたことを意識しつつも、同じく引歌の畳みかけでまともに応酬することは避けて、歌一首にまとめたものであろうか。この歌の「真木の板戸」について、『研究』（二二四頁）では次の二首を参考に掲げる（『全対訳』（三二八頁）は前者のみ）。

をとこの、「こむ」とてござりければ
・山里の真木の板戸もささざりき頼めし人を待ちし宵より
（『後撰和歌集』卷九・恋一・五八九番・よみ人しらず）
土御門右大臣家に歌合し侍りけるに、秋の月をよめる

・おほぞらの月の光しあかければ真木の板戸も秋はさされず
（『後拾遺和歌集』卷四・秋上・二五二番・源為善朝臣）
『後撰集』の歌も念頭にあった可能性はあるが、本歌と見るべきは、むしろ次の歌であろう（『鎌倉時代物語集成別巻』二〇〇一年、笠間書院）所収「引歌表現索引」の「真木の板戸」の項（二八六頁）に、すでに指摘がある）。

君やこむ我やゆかむのいさよひに真木の板戸もささず寝
にけり〔古今和歌集〕卷十四・恋四・六九〇番・題しらず／よみ
人しらず

この歌を踏まえた文意は、次のようなものになるう。

（行こうか行くまいか）ためらった真木の板戸が、古歌
にいう「ささず寝」てしまったあの板戸であるなら、
（自由に出入りできるので）夜が明けた、日が暮れたと
（時間も気にせず）、毎日のように（逢って、あなたに）馴
れ親しみもしましょうが。

（宮様が側におられる現状では、それもならぬのが、われながら）情
けなく……。

なお、下句の参考歌としては、次のようなものが指摘できる。

・かきくらし晴れせぬ雪の中にただ明けぬ暮れぬとながめ
てぞふる〔御津の浜松〕卷四・三三二頁

・雲かかるとみ山にふかき櫃の戸の明けぬ暮れぬと時雨をぞ
聞く〔続後拾遺和歌集〕卷六・冬・四一六番・題しらず／参議雅
経

左大臣の返事を受け取った北の方の反応については、従来、
首を傾げたくくなるような読みがなされていたのであるが、妹
尾好信『在明の別』本文校訂覚書（同氏著『中世王朝物語』表
現の探究）二〇一一年、笠間書院所収）において行き届いた批判・

検討がなされており（三六〇―三六二頁）、全面的に従うべきで
あると考える（前掲の本文には、すでにそれを反映させている）ので、
ぜひ参照されたい。なお、そのさまが、「足摺とかや、嬰児の
音をや立てそへ給ふらん」と、諧謔の気味のある誇張表現を
とるのは、妹尾氏も用例に掲げる『源氏物語』「蜻蛉」巻の、
「（右近が）足摺といふことをして泣くさま、若き子どものやう
なり。」（⑥二〇二頁）と見える表現が念頭にあつたせいかとも
思われる。

四「つらみにはらいらせ、かならずたすけさせ給へ。」

ついで、「四六 左大臣、横川の僧都を迎えに」の段を取り
上げてみよう。

出産を控えた中宮が、物の気のせいとか、ひどく苦しむので、
加持祈禱のために集められた山の座主以下の大勢の高僧たち
とは別に、女院の命により、「よかはにさきのそうづにてこも
りゐたる、「いまはこのよの事、みずきかじ」とちかいて、さ
らにうごかぬを」（四〇一頁／50オ／50ウ）、左大臣を特別に差し
向けることで、招請しようとする。

左大臣は、十二月の半ば、雪の降り積もる厳冬の比叡山を
登り、横川に僧都を訪ね、女院の意向を伝えたが、僧都は、

一度立てた山籠りの誓いを破ることはできないと、恐縮しながらも招請を固辞する。仏への誓約書までも見せられては、左大臣としても引き下がるほかなく、かれの僧都への返答が、次のように描かれる。

「さはたゝかうながらも、このたび（中宮が）たいらかにものし給（ふ）べき御いのりをばさせ給へ。かうふりはえ侍りつるかひなからんうらみにはいらせ、かならずたすけさせ給へ。心よりほかにほだしおほく、えゆきはなれ侍らねど、いはけなくよりこのよをいとふ心なんふかく侍る。なをのちのよはかならずたのみきこえさせん」
などちぎりをきてかへりいで給（ふ）。（四〇二頁／51オ〜51ウ）

最初の一文は、『全対訳』に、「では、こうして庵に居られながらも、この度の中宮ご安産のお祈りだけはどうぞなさってくださいませ。」（三三五頁）と訳してあるような理解でよく問題ないが、細かく見ると、傍線部Aの本文校訂に揺れがある。写真複製によれば、ここは「御いのりをいさせ給へ」と読めるところであるが、従来、「いさせ」の「い」は「は」と判読されている。「八」を字母とする「は」と見たものであろうか。そのうえで、『研究』（二三四頁）『全対訳』（三三四頁）では「は」を「せ」の誤りと見て、「御いのりをせさせ給へ」

と校訂している。『集成』には傍記もなく、「御いのりをばさせ給へ」とするが、これでは傍線部が文法的に容認しがたかたちとなる。そこで、折衷案を提示すれば、「いさせ」の「い」は「は」の誤写と見なし、連語「をば（を+は）」を認定、「させ給へ」の前には「せ」一文字が脱落しており、もとは「御いのりをばせさせ給へ」であった、という処理ではどうだろうか。「いのりをはせさせ」には、見分けが悩ましい。「遠」と「世」の草体が連続するので、ひとつ脱落ということもありそうに思うのである。

つづく一文に問題がある。ただし、前半の「かうふりはへ侍りつるかひなからん恨みに」については、『全対訳』の「こうして、わざわざここまで頼みにやってきたその甲斐のない恨みには」（三三五頁）との理解で、とくに問題ない。不審なのはそのあとである。『研究』では、「祓ひさせ、必ず助けさせ給へ。」（二三四頁）と本文を整理し、『全対訳』では、「どうぞ祓いをさせ、かならず中宮をお助けくださいませ。」（三三五頁）と訳している。『集成』の傍記も、その考えに同調するもののようにある。しかし、「祓ひさせ」は、さきの「御いのりをばさせ」同様、文法的に認められなやかたちなので、「祓ひさせ」と一文字補う必要がある。だが、そもそもここは、「はいららせ」という文字列を読み解くために、わざわざ「らせ」

を「させ」と改訂してきたのではなかったか。しかるに、その改訂案そのものに疑問が生じたのである。となれば、變にそれをいじるよりは、むしろいったん白紙に戻して、一から考え直したほうがよいのではあるまいか。

僧都の招請を諦めた左大臣ではあるが、山に残る僧都に對しても、中宮の安産の祈禱については、しっかりと依頼している。最初の一文がそれである。ところが、『研究』『全対訳』の解釈では、次の一文でも、同様の依頼をしていることになる。大事なことなので繰り返し、という見かたもできようが、率直にいつて、はなはだくだい。加えて、高僧に「被ひ」を依頼するという、珍妙な内容でもある。これら、もろもろの不審を晴らすには、まったく別の読みかたが求められているのではなからうか。

左大臣の主張を整理すると、——人臣の最上位にいる自分が、あなたを都に招請すべく、こんな山奥までわざわざ出向いたのに、そのかいなく下山する仕儀となつたのは、まことに残念至極である。だから、そんな自分の無念を晴らすべく、「かならず助けさせ給へ」——このような文脈であることに、疑問の余地はない。『研究』などが、左大臣の恨みの代償に、中宮を助けてほしい、と読み解いたのも、兄と妹という骨肉の關係ゆえの依頼であると見れば、とくに奇妙であるともい

えまいが、一般論としては、自分が受けた恨みを清算するために、自分のことはさておいて、別途△△を優先してほしい、との交渉は、なにやら見返りを求めての裏取り引きめいていて、どうにも不自然の感が拭えないのである。だとすれば、「かならず助けさせ給へ」というのは、やはり左大臣じしんについてのことでなければなるまい。

そこで、あらためて、

かうふりはえ侍りつるかひなからんうらみには らいらせ
かならずたすけさせ給へ

という文字列の、どこに不審が発生しているかをチェックすると、罫線で囲つた四文字以外には、表現上なら瑕疵のないことがわかる。では、左大臣が、今回の無念の代償に、きつと助けてほしいと僧都に依頼する「らいらせ」とはなにか？
ここまでくれば、答えはおのずと明らかであろう。すなわち、自分の「来世」を「かならず助けさせ給へ」と依頼したのである。「うらみにはらい（ら）せかならず」という「ら」の連続が、余計な一文字誤記の原因であつたらうか。

ここさえ解決すれば、以下の読解は容易である。「心よりほかにほだし多く、え行き離れ侍らねど、いはけなくよりこの世をいとふ心なん深く侍る。」——今すぐ出家するのは簡単ではないが、幼少時より道心深い自分であつた。だから、「なほ

後の世はかならず頼みきこえさせん」——来世のことでは僧都を頼みにするので、導いてほしい。「など契り置きて」——左大臣は、僧都と将来の約束を取り交わして、下山する。

五「おとゞいかに御かひををくり給。」

以上のような場面の直後、都への帰途を急ぐ左大臣一行は、あいにくの風雪のため、途中、大原のとある家に避難することになる。その庵主である尼との対面のくだりが、なかなか感動的な読みどころとなっているのだが、ここで詳しくふれる余裕はない。その後風雪も弱まり、左大臣はようやくにして都に帰り着いた。そのときの様子が、次のように描かれている。「五〇 女院に尼君との一件を語る」の段である。かへりまいり給へれば、「いかに、そうづ物せずや」との給（ふ）ま、に、おとゞいかに御かひををくり給（ふ）。（四〇五頁／55ウ／56オ）

傍線部、『集成』での翻字と傍記は、『研究』（二二八頁）『全対訳』（三四四頁）での本文校訂が踏襲されているのだが、写真複製をよく見ると、「いか、」については、「いかく」とも判読でき、「いとゞ」との改訂案とは別に、「いたく」と改訂することもできそうに思う。また、「をくり給」の「を（遣）」は、

むしろ「せ」の字に近いように見える。「つくり給」の誤りと見ることには賛成であるが、翻字の厳密を期せば、「せくり給」とすべきであろう。

ところで、このくだりの解釈について、『全対訳』では、「都に帰り、女院のもとに参上しなされたところ、女院から、「どうであったか、僧はおいでにならないのか」とおっしゃるにつけて、左大臣も大層困って、泣き顔をなさる。」（三四五頁）と現代語訳する。だが、このような理解でよいのだろうか。たしかに、女院の命を受けて、左大臣は僧都の招請のため、はるばる横川に向かったわけであるが、帰参した場所は、中宮が加持祈禱を受ける太政大臣邸であるに違いない。だとすれば、帰ってきた左大臣に、すかさず、「いかに、僧都もせずや」と結果を質したのも、太政大臣なのではないか。そして、招請がかなわなかったことを知り、心配のあまり「御貝を作り給」うた「おとゞ」というのも、左大臣ではなく、太政大臣であろう。

「貝を作る」という表現について、『研究』（二二八頁）では、次の二例（『全対訳』三四四頁）は前者のみ）を参考に掲げている。
・入道、「いまはと世を離ればべりにし身なれども、今日の御送りに仕うまつらぬこと」など申して、かひをつくる
もいとほししながら、若き人は笑ひぬべし。（『源氏物語』「明

・(好色な翁である典葉頭は)ツクノト思ヒ居タルニ、此被謀かくはかられテ(女を)逃シツレバ、手ヲ打テ妬ガリ、足摺ヲシテ極氣いひじナル顔ニ貝ヲ作テ泣ケレバ、弟子ノ医師共ハ、蜜ニ極クナム咲ヒケル。(今昔物語集 卷二十四・第八③二六六頁)

いずれも、年配の者が悲しんだり、あるいは悔しがって「貝を作る」様子が、みつともないということで、若い者たちの笑いの的になっていることに注意したい。類例として、

その年の祭の使に、中将殿(長家)出でたまへば、大殿(道長)にもこの殿(行成)にもさらなり、摂政殿(頼通)まで思しいそがせたまふ。したてたてまつらせたまひて、姑の北の方(行成室)見たてまつりに出でたまひて、何ともなくただかひをつくりたまへば、さぶらふ人々、をこがましなど笑ひきこゆるもをかしうなん。(采花物語 卷十四「あさみどり」②一五一頁)

を拾うこともできるが、これは嬉しさのあまりの泣き顔であり、いささか趣を異にする。それでも、若い者たちの笑いの的となつてゐることは、三者共通する。こうした用例に照らしても、若い左大臣について、「大層困つて、泣き顔をしながら」と解釈することがいかに不自然であるかは、おのずと感得されよう。そして、「おとゞ」を祖父太政大臣だとするこ

とで、はじめてこの場面の理解は十全なものとなる。

六「をはする日々に」「ひまを見ず」「かはり給え・」(註)

最後に、「六一 内大臣の姫君も倒れる」の段を取り上げてみよう。

さるは、かの君(四条の君)もまたおなじさまになやみ給(ふ)。かゝるにうちそえて人はやすからずきこゆべし。

との(左大臣)をはする日々にをもりつゝ、あなたこ

なたかはるゝやみ給へば、さらに思ひやるかたなし。さはいへど、うちのをとゞはひかずもあさく、御なやみも

よろし。こなた(右大臣の大君)はいといみじくくるしく

し給(ふ)に、あるかぎりうつし心もはせず。すこし

ひまを見すとて、うちやすみたるあか月がた、にはかに

せきあげて、あえなくたえいり給(ひ)ぬ。れいのをとゞ

(左大臣、いだきもちて、御ゆをすくひいれ給(ひ)、御

かほ、ぬらし給へど、いとかひなく、たゞかはりにか

はり給え・、右のをとゞこゑをたて、なきまどひ給(ふ)。

(四二二〜四二三頁/68オ〜68ウ)

左大臣の正妻である右大臣の大君は、懷妊して以来、物の気によって苦しめられるようになる。ついで妾妻の四条の君

も懐妊するが、同様の状態に陥つたため、左大臣はふたりの間を、看病のため、右往左往することとなる。物の気の正体は、左大臣との逢瀬の絶えたことを嘆く中務宮の北の方の生霊であり、恋しい左大臣の行く先を追うようにして、ふたりの妊婦に交互に取り憑き、命を奪おうとする。

傍線部Aは、『全対訳』の現代語訳に、「左大臣がおいでになるその日その日に病状は重くなる一方で」(三七二頁)とある解釈で、とくに問題なさそうにも思えるが、「おはする日々に」との表現に、落着かないものが感じられる。「日々に重りつつ」というと、『源氏物語』「桐壺」巻に、「日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、」(①二二頁)とあるのが想起されるが、ここでは、ふたりの妻が、左大臣の来訪にあわせて交互に苦しむことをいっているので、「日に日に重くなる」では、しっくりしないのである。そこで、改訂案を提示すれば、「日々に」を「たひに」の誤りと見てはどうだろうか。「たひ」が顛倒して、「ひた(多)」↓「ひ、」となったと考えるのである。「おはするたびに」であれば、「かはるがはる病み給へば」ともうまく繋がるように思われる。

傍線部Bについては、『研究』に、「大君の容態が、小康を保っているというので。」(二四三頁)と注し、『全対訳』の現代語訳(三七三頁)も同様である。意味的にはこれでよいように

も思えるが、「隙を見す」という表現は、やはり不審とするほかない。そこで私見を述べるならば、「見」は「は(者)」の誤写であるに違いない。すなわち、元来は、「すこし隙おはすとて」と読むべきところなのである。『源氏物語』「葵」巻に、
すこし御声も静まりたまへれば、隙おはするにやとて、
宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、
ほどなく生まれたまひぬ。(②四一頁)

とあるのがよい参考になる。なお、詳細は省くが、巻二の終盤から巻三にかけて、左大臣のふたりの妻に物の気が取り憑く一連の場面には、「葵」「若菜下」両巻での同様の場面に基づくとおぼしき表現や趣向・展開が随所に見て取れるのであり、これも、そうした影響の表れと見てよい。

傍線部Cに施された傍記も、『研究』(二四三頁)『全対訳』(三七二頁)での本文校訂を踏襲したものである。ただし、「給え」のあとに一文を補うという処置が最善であったかは、疑問なしとしない。「え(衣)」の文字は、写真複製で見ると、なかなか微妙な書体であるのだが、この文字については、「に」の誤写と判断できる例が、いくつか確認できるからである。すなわち、「かたみえしほる袖の気色」(巻一・三三〇頁/19ウ。ただし、『集成』は「かたみに」と翻字)、「このとのえはいみじく御なかうるはしきうちにも」(巻一・三三九頁/34ウ。ただし、『研究』「五

四頁』『全対訳』〔二〇二頁』『集成』いずれも「このものには」と翻字）、
「御むかへにまうで給えけり」（巻二・三八二頁／17ウ。ただし、『研
究』〔一八二頁』『全対訳』〔二六二頁』『集成』いずれも「給ひけり」の誤
写と見る）の三例は、圈点を付した「え」が、いずれも「に」
の誤写であると見られる（拙稿Dを参照）。だとすると、ここも、
「ただ変はりに変はり給ふに」と改訂することができ、わざわざ
ぎ文字を補うことなく、すんなりと読むことが可能になるの
である。

おわりに

以上、わずか六箇所を取り上げるとどまったが、巻二に
限っても、検討すべき課題は山積みである。それらの問題を
解明するためには、本稿においても実践してきたように、ま
ずは写真複製に立ち返り、古典読解の基本を忘れることなく、
いらぬ思い込みを排して、先行研究を虚心に吟味すること――
それこそがなにより肝要である。ひとつひとつを見れば、蝸
牛の歩みのものどかしさはともなうであろうが、筆者じしんも、
倦まず、弛まず、諦めず、検討・考察を重ねてゆきたいと思
う。（二〇一九年四月稿）

（注）既発表の拙稿は以下のとおりである。

- A 『在明の別』読解考――「この君はかりかにこもり給て」を中心
に――」（『語文研究』122号、二〇一六年二月）
- B 『在明の別』卷一本文校訂考」（『国語と国文学』95巻5号、二〇
一八年五月）
- C 『在明の別』卷三本文校訂・読解ノート」（『文学研究』116輯、二
〇一九年三月）
- D 『在明の別』本文校訂箇所一覽（稿）」（『文献探究』57号、二〇一
九年三月）

（からしま まさお・本学教授）